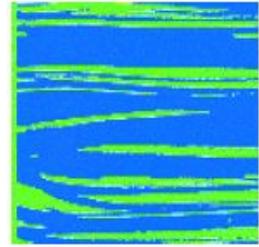


日本行動分析学会ニューズレター

# J-ABAニューズ



2019年 冬号 No.93 (2019年01月30日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之  
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内  
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>  
E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

## 自主企画シンポジウム参加記

「新しい研究領域としての『臨床言語心理学』は可能か」に参加して……………村井 佳比子  
教育講演参加記 【高齢を生きる～ゲームは終わらない～】を拝聴して……………吉田 真希  
公募企画シンポジウム開催記  
「行動の持続・固執を巡る研究の現状と今後の展開」：学会で発表しましょう……………遠山 矢緒人  
代議員選挙のお知らせ……………選挙管理委員  
2019年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」……………渉外委員会  
編集後記……………ニューズレター編集部

---

## <自主企画シンポジウム参加記>

### 新しい研究領域としての『臨床言語心理学』は可能か」 に参加して

村井 佳比子

(神戸学院大学)

日本行動分析学会第36回大会の初日、大会準備委員会の委員長でもある武藤崇先生による自主シンポジウム「新しい研究領域としての『臨床言語心理学』は可能か」が開催されました。臨床におけるコトバをどう研究するかは非常に難しいテーマです。冒頭で武藤先生は「行動分析学が持っていないものをみつけた」「もともと行動分析学は他の分野を取り入れながら発展してきた」とお話しされていました。行動分析学を広め、応用するだけでなく、新たな分野を切

り開く気概を感じた2時間でした。

1人目の話題提供者は企画者の武藤先生でした。武藤先生は「臨床言語心理学」のパラダイムを4つのレベルから検討され、さらに具体的な研究例についてお話しくださいました。面接場面でのクライアントの抵抗（もしくは **challenging behavior**）とみられる反応は、セラピストがクライアントを是認せず、一方的に提案（閉じた質問）を行えば行うほど多くなることに関数で示されるとのこと。この研究では、

セラピストがクライアントを是認する行動が始まるとともに、閉じた質問が嫌悪刺激ではなくなるという推移も示されています。今後、音声認識ソフトで会話を読み込み、処理することで、精度の高い会話分析が本当に可能になるかもしれません。2人目の三田村先生は、アサーションとは何かを行動分析学からとらえ直すという試みについてお話しくださいました。アサーションという行動クラスを「より効果的に課題を達成」し、さらに「相手に適切と受け取られる」ための自己表現であるとして、話し手のコミュニケーションが望ましいものであるかどうかについての聞き手の評価を効果測定に加えたとのこと。海外で生まれたアサーションは権利を主張することから始まったものであり、日本の文化にはやや異質なものです。この視点はアサーションだけでなく、海外から取り入れた臨床の技術すべてに必要だと感じました。3人目の大月先生は、恣意的に適用可能な関係反応 (*Arbitrarily applicable relational responding: AARR*) について、基礎研究をふまえてお話しくださいました。単なる記号や音でしかないコトバがどのように感情や意味を持つようになるのか、他者による強化や文脈からの手がかりによる制御など、コトバに関連する研究は行動分析学を越えて無限につながることを感じました。

指定討論者である杉原保史先生は心理臨床における統合的アプローチを、また、森岡正芳先生はナラティブ・アプローチを専門とされています。杉原先生は心理療法師のコトバの使用について、たとえば精神分析は実践から作り上げられたアートであり、この実践によるアートと

サイエンスをどう統合させるかが課題であると述べられました。心理臨床にたずさわる人であれば、実践の積み重ねによって得られる「感覚」があることを知っています。心理臨床だけでなく、新しい実験装置を作ったり、研究の新たな着想を得たりする場面でも同様に、他者に教えることが難しい勘どころがあります。このアートの部分をどう解明し、サイエンスとして成立させるか。杉原先生は、日本では「聴く」ことを重視してきたためにコトバについての研究が少ないことを指摘され、行動分析学の可能性を示しておられました。森岡先生はヴィゴツキーやサリバン、ヤコブソンらの言語理論についてお話しくださり、文化や経験の影響、コミュニケーションの瞬間に活性化される機能など、コトバの持つ複雑な広がりを見ることの重要性をお話しくださいました。

森岡先生のご専門であるナラティブ・アプローチは、今、非常に注目されているものです。私たち人間は物語(ナラティブ)が好きです。この記事も、私が聞き、理解した「私の物語」にすぎません。他の方が書かれれば、全く別の物語になるでしょう。私はこのシンポジウムに参加して、最近読み終えた Keller 先生の自叙伝を思い起こしました。この書籍には Skinner 先生との出会いや、その基礎研究を教育に応用した Keller 先生のパイオニアとしての歩みが記されています。常識とされているところに素朴な発想で切り込んでいく。このシンポジウムを企画された武藤先生も、基礎研究の視点から次々に心理臨床に新たな問題提起をされているように思います。このパイオニア精神が行動分析学の魅力なのだと強く感じたシンポジウムでした。

<教育講演シンポジウム参加記>

## 【高齢を生きる～ゲームは終わらない～】を拝聴して

吉田 真希

(山野美容芸術短期大学)

日本行動分析学会 第 36 回年次大会に開催された教育講演の一つである浅野俊夫先生の「高齢を生きる～ゲームは終わらない～」を拝聴いたしました。一昨年の福島での第 35 回年次大会の超高齢社会のシンポジウムで登壇された浅野先生に、この講演を今後アーカイブ化するためにもう少し詳しく話を聞きたい、さらに思い残すことなく伝えていただきたいという武藤崇先生の軽妙な司会からスタートしました。今回の年次大会には超高齢化社会に関する講演がもう一つあり、『超高齢化社会における行動分析学(2)』この話題が行動分析学の中でも注目されつつあることがうかがえます。浅野先生の講演では、当事者として高齢者の現場の声を次の世代へ伝え、さらに行動分析家としてどう感じているかをお話いただきました。講演は、高齢者全般の現状についてと、浅野先生ご自身の現状についての 2 段構成になっておりました。

まず初めに、人間とは何かということをも 5 つの特徴からご説明いただきました。1 つ目は学習によって発達する音声が使えること、2 つ目は言語そのものを聞き手として生み出す言語コミュニティがあること、3 つ目は音声だけでなく描画ができること、4 つ目は模倣だけではなく教育行動があること、5 つ目は、直立二足歩行によって音声と大きな脳を手に入れたこと。これら 5 つの特徴以外にも音楽行動など、人間以外には出来ないことをすることによって元気であられるとお話されました。また高齢者の問題として生活の質を高めるためにはどうしたら良いかをスキナーの著書(Skinner & Vaughan, 1983)



での「老人は異邦人のようなもの」という言葉を紹介されながらお話してくださいました。自分だけでなく環境が変わることをいかに新しい旅のように楽しむか、新しいオペラント強化される機会が多いことが老人の QOL の質の高さに繋がる、寝込んでいる暇はない、挑戦しなさいと力強くおっしゃる姿がとても印象的でした。そのうえで、しかしながら日本の高齢者には年齢による差別があるということも、具体例を用いてご説明くださいました。今まで年齢で区切られることを当たり前のように考えておりましたが、便利で平等な反面、業績や個体差を無視したものだと気がつかされました。

そしていよいよ浅野先生ご自身のお話です。こちらは前半で新しいことにチャレンジし、新しい強化刺激を作ることが大切と述べられたことをご自分でも実践している内容で、浅野先生も楽しそうにお話されていたりしゃるようになりました。庭園管理士を優秀な成績で取得したり、自炊が出来るようになったり、ドローンを飛ばして撮影をされたりと、こちらでは書きだせないくらいたくさん新規獲得レポートリー

が。浅野先生の新規獲得レパトリーには強化刺激の種類は違えども、必ず他者が存在し、他者との交流を楽しんでいच्छることが共通項のようです。まさに前半でお話くださったヒトの特徴をすべて網羅しているのが浅野先生の現在のようにでした。

ゲームは終わらないという副題は、全てを拝聴した後、非常に示唆に富んでいるものであったことが分かります。浅野先生が人生というゲームの主人公として、年齢から生じる問題を

様々な新規アイテム（新規獲得レパトリー）を手に入れながら攻略し、しかもそれを誰よりも楽しんでいच्छるお姿に感銘を受けました。行動分析家が加齢したときのひとつの理想像、ヒントとなるのではないのでしょうか。浅野先生、ありがとうございました。

Skinner, B. F., & Vaughan, M. E. (1983). *Enjoy old age: A program of self-management*. New York, NY: Warner Books.

<公募企画シンポジウム開催記>

## 「行動の持続・固執を巡る研究の現状と今後の展開」:

### 学会で発表しましょう

遠山 矢緒人

(明星大学大学院人文学研究科)

日本行動分析学会第36回年次大会の3日目に開催された、公募企画シンポジウム「行動の持続・固執を巡る研究の現状と今後の展開」にて、初めて話題提供をさせていただきました。

企画の趣旨としては変化抵抗や反応復活、およびそれらを包括する行動モメンタム理論を中心として、行動の持続や固執のプロセスについての研究を概観し、展望を行うものでした。企画者や話題提供者は動物実験を主とした基礎分野の人が多く、私は話題提供者の中で唯一の応用分野の人間として、「臨床的な視点から見た行動モメンタム理論の意義」と題して、行動モメンタム理論がもたらした応用技法の高確率反応連鎖技法の紹介と、行動モメンタム理論が応用場面においてどの程度当てはまるかを検討した研究の紹介、そして応用における行動モメンタム理論の意義と今後の展望について話させていただきました。

当日は裏のPBSとACTのシンポジウムが盛況だったようで、私の発表内容が当該分野について知らない実践家や応用分野の人を対象とした内容だっただけにややアウェーな感じを受けつつも、それでも多くの人々に私の拙い発表を聞いていただきました。当日お越しくくださった皆様にはこの場でお礼を申し上げます。

さて、せっかくなので私が話題提供者として登壇するまでの経緯をごく簡潔にお話したいと思います。今回私は慶應義塾大学の藤巻峻先生との連名での発表となっています。元々は大

学間での勉強会で知り合ったのですが、学会の数カ月前に私から藤巻先生に「反応復活に興味がある」とメールを出したことがあり、ならばということでシンポジウムでの発表のお誘いももらうこととなりました。誘われたなら特別断る理由もないということで申し出を受けましたが、それまでに反応復活や行動モメンタム理論に関する研究をしたことはありません。なので私は、ろくに研究業績も持たないまま、ただ「興味がある」と言っただけでシンポジウムの話題提供者になった人、という割と珍しい人間になります。しかしそこからが一苦勞、よく知らない領域について調べて発表をまとめなければなりません。不安と後悔の中、身近な人からは「深く考えずにただ思ったことを言えればいい」とか「心配しなくても初めから誰も期待してない」などの温かい言葉(?)をもらいつつ、費やした時間が成果に結びつかない日々を送りました。結局藤巻先生の親切なサポートのおかげで何とか形になったという感じでした。ですので、もし私の発表の良いところは藤巻先生の手柄で、悪いところはすべて私の落ち度です。

このような話をわざわざした理由は学会で発表したいけど気が引けて実行できずにいる人(主に学生)がいるのではないかと思ったからです。たくさん業績がある人や既に何かを成し遂げた人、もしくはすごい研究でないと、シンポジウムを含む口頭発表をしてはいけないような気がする。もしそう思っている人がいたら、ど

うやらそうではないということがお分かりいただけだと思います。私の経験がそういう人々の背中を押す一助になればと思います。なので学会で発表したい人は、学会で発表しましょう。

個人的な感想として、シンポジウムでの発表は苦しまされましたが結果としていい経験になったと思います。よく「参加することに意義が

ある」などと言われますが、学会に関して言えば「参加する」と予め決めて逃げ道をふさぐことで自身の成長を促せる場なのかもしれません。なので学会で発表したくない人も、学会で発表しましょう。私が言えることはそれに尽きます。

## 代議員選挙のお知らせ

### 選挙管理委員

本学会は、2015年4月1日に一般社団法人日本行動分析学会となり、もうすぐ4年が経過しようとしています。この度、定款に従い、立候補制による代議員選挙を下記のとおり実施しますので、お知らせします。

#### 記

- ・代議員選挙の公示：2019年1月10日  
※正会員は、代議員に立候補することができます。
- ・代議員立候補受付期間：2019年1月15日～2月5日  
※代議員立候補届出書に記入の上、事務局まで添付ファイルをメールで送付ください（送付先：[election@j-aba.jp](mailto:election@j-aba.jp) 件名は：「立候補届出：氏名」）。
- ※代議員立候補届出書は、学会HP（<http://www.j-aba.jp>）からダウンロードができます。
- ・代議員の総数：20名以上30名以内（定款第5条2項）  
※代議員立候補者が30名を超えた場合、代議員選挙を実施します（HPに掲載）。
- ※代議員立候補者が30名を超えない場合、無投票当選となります（HPに掲載）。
- ※代議員立候補者が20名に満たない場合は、

補欠選挙を実施します（HPに掲載）。

- ・代議員の任期：就任日（2019年5月20日）から4年後の代議員選挙終了まで
- ・選挙関係書類の正会員への送付：2019年2月20日  
※無投票当選の場合、選挙関係書類の送付は行いません。
- ・選挙投票期間：投票用紙到達日～3月5日消印有効
- ・公開開票日：3月9日（時間・場所をHPに掲載）
- ・開票結果と選任結果の公示：2019年3月12日頃（HPに掲載）
- ・当選者からの代議員就任承諾書の受領締切：2019年4月15日
- ・選任された代議員による社員総会：2019年6月15日（土）に開催し、役員（理事・監事）の選任を行います。その後、理事会にて理事長の選任を行います。
- ・本学会の定款・細則は、学会HPから閲覧ください。

代議員選挙に関するお問い合わせは、日本行動分析学会選挙管理委員会 [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp) までお願いします。

以上

# 2019年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に 対する助成事業」

## 渉外委員会

日本行動分析学会では、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、毎年、ABAIやSQABなどの国際学会参加を助成する事業を行っています。2019年度もこの事業を継続して実施します。

来年度の助成対象は2019年5月23日から27日に米国シカゴ（イリノイ州）で開催されるABAI第45回年次大会またはSQABです。申請するためには、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカーのいずれかであること、また口頭発表、ポスター発表では第一発表者であることが条件です。その他の条件については学会HPの募集要項をご確認下さい。

応募〆切は2019年3月31日（消印有効）です。学会HPからダウンロードできる申請書に必要事項を記入し、その他の資料とあわせて日本行動分析学会事務局まで郵送して下さい。

学生会員の皆さまのABAI/SQABへの参加をお待ちしております。

<応募先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

学会HP : <http://www.j-aba.jp/>

## 編集後記

年が明けたと思ったら、あっという間に1月も終わってしまいました。皆様はいかがお過ごしでしょうか。寒さも徐々に厳しくなって、朝起きて布団から出るまでの反応潜時が指数関数的に増加している今日このごろです。

さて、今号もおかげさまで、無事に発行することができました。毎度毎度のことですが、ご執筆、投稿いただきました先生方には改めて御礼申し上げます。今号は、前号で掲載しきれなかった年次大会の記事がいくつか掲載されています。それだけ今年度の大会が盛り上がってい

たということでしょうか？京都の暑い夏が思い起こされます。

さて、本ニューズレターは学会や研究会の参加記だけではなく、ご自身の研究内容や関心領域、行動分析学への熱い思いなど、様々な内容の記事を募集しています。いつもお願いにはなりますが、引き続き皆様からのご寄稿をお待ちしています。

それでは、これから本格的に寒さの厳しい季節がやってきますが、皆様のご健勝を布団の中からお祈り申し上げます。(MK)

## J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトにて公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866  
日本大学生物資源科学部心理学研究室  
日本行動分析学会ニューズレター編集部  
眞邊 一近  
E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp